

## イベント報告

吉野作造 生誕130年 没後75年記念

## 朗読会「吉野作造をしのぶ」開催!

2009年3月14日(土)

吉野作造生誕一三〇年没後七五年を記念して、朗読会「吉野作造をしのぶ」を開催しました。多くの方に吉野の人柄、魅力を知ってもらおうと、吉野がのこした言葉や、没後に寄せられた追悼文を朗読、解説を加え紹介しました。当日は、県内外を問わずたくさんのご参加があり、みなさん日頃の吉野の姿に想いを馳せながら、熱心に聞き入っていました。この他、フルート奏者の鎌倉亜紀子氏、ピアノ奏者の加藤重美氏をお招きし、吉野の写真を背景に、唱歌や童謡など十曲をご披露くださいました。記念館全体が懐かしい雰囲気につつまれ、参加者のみなさんも口ずさんでいました。

## 吉野作造の言葉

吉野が自らの思想、人生について語った言葉の中から、十点を選び朗読しました。一部を紹介します。

人生に逆境はない。どんな場合でも人と世の為に尽くすべき機会が潤沢に恵まれている。

吉野の人生の指針をあらわした言葉です。苦境にあっても前向きに生きて行こうとする吉野の決意が表れています。

互いに尊敬し合う心が生じて来ると、互いに信じる心は益々大きくなる。

吉野の論文「社会と宗教」(『新人』一九二一年七月)の一文。吉野が抱く恋愛観を述べています。キリスト教徒であった吉野にとって恋愛は、お互いのなかに神を認め合う

究極の人間関係だと考えていました。

自分は平素現在在るがままの自分の生活を充実したいと心掛けています。

「予は斯く行ひ、斯く考へ、斯く信ず」

『中央公論』一九二一年十月)の一文。公人として研究に励み成果をあげ、家庭にあつては父として家族に十分な満足を与えてあげようと日々努力を惜しまないという思いが込められています。

## 吉野作造に寄せられた追悼文

吉野の没後、友人、同僚、弟子、家族から追悼文が寄せられました。多くは『故吉野博士を語る』(一九三三年)などに掲載されています。今回は六点を朗読しました。吉野が多くの人に慕われていたことが伝わる文章です。そのなかから、吉野の死の前後を回想した三女小松光子の一文を紹介します。

「納棺の時父の身廻りの品の他に、特に、小さいはさみ(之は口ひげを切る時用ふ)、かみそり(ひげの生えるのが大嫌ひだったから)、眼鏡、万年筆、原稿用紙、中央公論等を入れて上げた。今父は元気な体で、眼鏡をかけて中央公論を読んだり、又生活から

超越した好きな原稿を楽しみながら書いてある事だろう。そして私達が一人づつ父の許に行き、やがて再び楽しい集ひの出来る時を待ってゐて下さるだろう。」

小松光子「その前後」(『故吉野博士を語る』収録)

